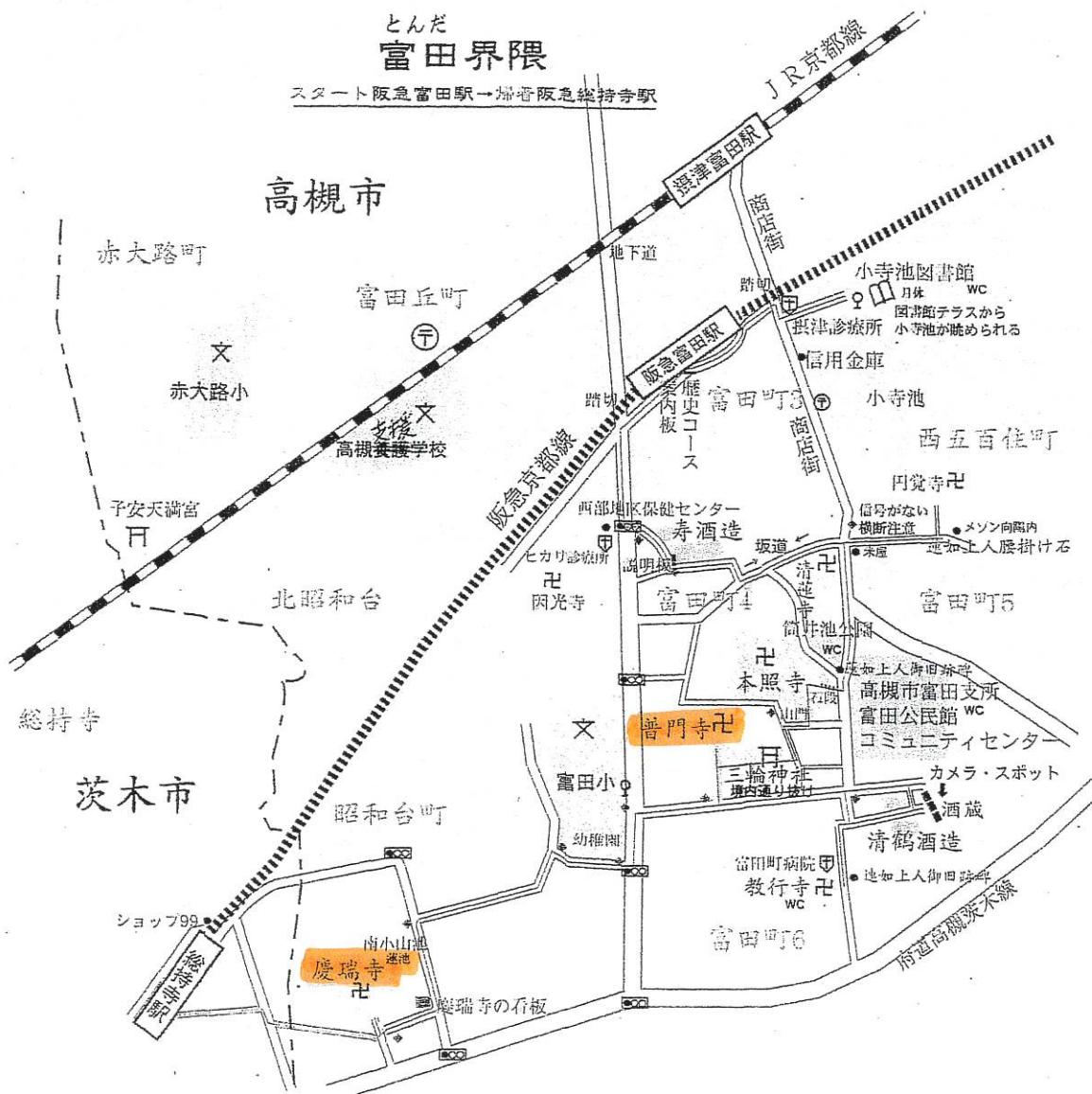


高 橋 市 日 中 友 好 協 会

—2023年新春見学会—

「隱元禪師 ゆかりの 慶瑞寺・普門寺を訪ねて」



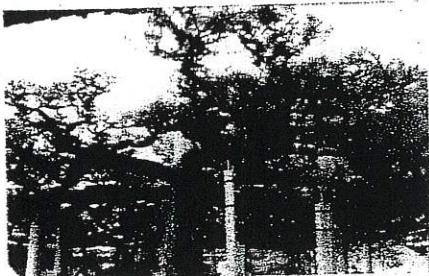
日 時 2023年2月18日(土) 午後1時~

見学先 慶瑞寺、普門寺

教行寺（キヨウギョウジ）（浄土真宗大谷派）

寛正6年（1465）本願寺8世蓮如上人が細川勝元からこの地を与えられて創建したといわれている。

文明7年（1475）蓮如は吉崎御坊を出て、若狭より丹波を経てこの摂津富田に入り、後に山科に本願寺の造営を始めたころ（文明10年）時をおなじくして、富田にも坊舎を建て、後に教行寺とした。天文元年（1532）管領細川晴元の兵により寺とここ寺内町は焼き尽くされたが、5年後には再建をみている。しかし元亀元年（1570）の石山本願寺攻めの時、再び灰燼に帰し、その後は大和箸尾（ハシオ）に教行寺は移され、本願寺宣如上人の命により、箸尾教行寺を本坊とし、富田教行寺は別防となつて、以来ここでの法灯が受け継がれている。



清蓮寺の黒松



慶瑞寺参道から本堂を見る



筒井池公園から見える本照寺の大屋根

清蓮寺（浄土宗）

酒造家清水家（紅屋）初代利重が天正13年（1585）の大地震で崩壊した清蓮寺を良閑和尚を招いて再興したと伝えられ、以降この寺は清水家の菩提寺となった。境内には樹齢400年以上といわれている見事な黒松があり、西側の墓地には入江若水の墓もある。

蓮如上人腰掛け石

富田町5丁目ー13の5階建てマンションの道に面した片隅に「蓮如上人腰掛け石」と刻まれた石があるが説明書きなどはない。

慶瑞寺（ケイズイジ）（黄檗宗）

観世音菩薩を本尊とする。始めは法相宗の寺で景瑞寺と言わっていたが、江戸期になって荒廃してしまっていた。

自坊普門寺を隠元に明け渡した龍溪が寛文元年（1661）にここに入り、再興して寺号を慶瑞寺とし、黄檗宗に改宗した。龍溪は後水尾法皇から多大の信頼を得た僧で、その為にこの寺には法皇の歯や仏舎利を治めた「聖歯塔」があり、また、寺宝として法皇の勅書をはじめ後光明天皇の倫旨、隠元、龍溪の直筆の書などがある。本堂に安置されている菩薩形坐像は8～9世紀の作とされ、平成元年に国の重要文化財に指定された

三輪神社

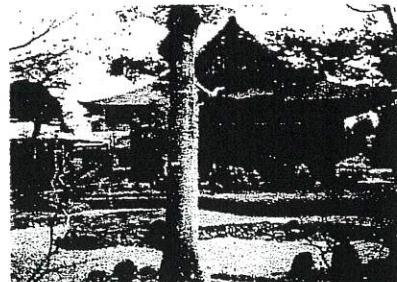
もとは隣にある普門寺の鎮守社であったらしいが、一説には奈良桜井の大神（オオミワ）神社からオオナムチ（大国主命）を勧請して創建したとも言われる。酒の神様として信仰を集め、境内の絵馬所には、古い絵馬が数多く掛けられているが、大方は色褪せ、剥げ落ちてきた。なかに、明治天皇が行幸のとき、天皇・皇后を慰めるために、住民が富田おどりを踊つて珍しい図柄がある。これも褪色が著しいが、かろうじて形が残っている。社殿、絵馬所、末社春日社などは平成17年に市の有形文化財に指定された。

普門寺（臨済宗妙心寺派）

明徳年間（14世紀末）に禪宗建仁寺派の寺として創建されたと伝えられている。永祿年間（16世紀後半）には普門寺城といわれ、室町時代の管領細川晴元や14代將軍足利義栄（ヨシヒデ）も滞在した。今も境内の北から南にかけて当時の土塁が残っており、晴元の墓と伝えられる「宝篋印塔（ホウキョウイントウ）」も境内にある。

元和3年（1617）に龍安寺（リョウアンジ）の龍溪（リョウケイ）和尚が入山し、明暦元年（1655）、明の高僧隱元（インゲン）禪師をここに招き、隱元は宇治に黄檗宗萬福寺を開くまでの約6年間滞在した。

明治の廃仏毀釈で多くの寺領や諸堂が失われたが、戦後、石畳やこけら葺きの方丈も再興された。方丈は昭和52年に国の重要文化財に指定され、平成12年には庭園を含む寺域全体が国の名勝に指定された。



普門寺庭園から見る方丈

拝観有料、要連絡

072-694-2093



釈迦如来像（普門寺本尊）

富田寺（浄土真宗本願寺派）

応永34年（1427）に本願寺7世存如（ゾンニヨ）上人が創建し、もとは本遇寺（光摂寺、光照寺と変遷）と言い、後に「富田御坊」言われ、更に本願寺の一宇も与えられ、本照寺と改められた。巨大なお堂はあるで城郭のよう、屋根の反りも真宗寺院独特の傾斜をもつ。これは敵の放つ火矢が屋根に刺さらず滑り落ちるようにしたものだそうだ。かつて天然記念物「富寿栄（フスエノ）松」があった。その巨大な根株だけが山門横にある。

富田寺内町の成り立ち

14世紀の終わりごろ明徳年間にこの地に禪宗寺院の普門寺が創建され、南北朝の争いの最中にはここに「普門寺城」として小規模ではあるが城郭が築かれた。また、これより少し下った15世紀の初め、応永年間に本願寺七世存如上人がこの地で、後に「富田御坊」と言われる本照寺を開き、同じく文明年間にには本願寺八世蓮如上人が「富田道場」を開いたので、富田は攝津地区での一向宗の一大拠点となつた。

しかし、天文元年（1532）の細川晴元の兵により寺内町はことごとく焼き払われ、しばらくして復興したもの、信長による石山本願寺攻めのときにもまた攻め落とされ、廢墟と化してしまつた。その後、本照寺は「富田の御坊」として復興され、蓮如上人の住んでいた教行寺も箸尾教行寺の別坊として復興された。

このように紆余曲折はあつたが江戸期の富田界限は真宗と禪宗の由緒ある寺々の門前町として、かつての繁榮を取り戻してきた。

また江戸期の初めに普門寺に中國明から渡ってきた隱元禪師が臨済宗妙心寺派僧らの計らいで一時（約6年間）この寺に住んでいたので、近郊からは言うに及ばず、日本各地から異国文化を学ばんが為にと、ここを訪れる大名武家、僧侶、大檀越が絶えず、混雜を極めたため幕府は一日の訪問客を200人にまでとすると定め、高槻藩をあずかる永井家が監視していたという。

この地区は京都と大阪を結ぶ水路（淀川）、陸路（西国街道）の両方からの至便の地であるだけに昔から人の往来も激しく、寺の町としては格好の地であったのであろう。今日でも昔の面影を偲ぶことができる町並みや寺の雄大な建物が残つており、比較的短時間の歩行で歴史の流れを味わえる。